

永田円了



慢性疲労を超えて

Beyond Your Fatigue

慢性疲労、それは特に働き盛りの年代に忍び寄る。無理をしてもがんばれる年代であるが故に、気にとめず動きつづける。疲労は少しずつ、少しずつ体内に蓄積し、身心をむしばむ。気がつけば、自分の周りはゴミの山、コンビニ弁当の殻がそのまま散乱し、かろうじて一人が身を横たえる空間が残るのみ。これが昨今のニュースでも登場するゴミマンションに至る現状である。

これらゴミマンションの住人には、二つの共通点がある。一つは、どの人も、外面（そとすら）はいいこと。二つ目は、家族がなく、孤立していることである。大手企業のエリート社員、40代看護師、50代映像関係の専門職、また妻が教員の共稼ぎ夫婦、どれも職場ではよく働く普通の人、しかし仕事が終わって帰るところには自分を待つ人がいない。一人コンビニ弁当を夕食にする孤立した私生活、ハウスはあってもホームがないのである。



慢性疲労から立ち直る

ただ忙しい忙しいの毎日の中でも、何か自分の行動のなかに“意味”を見つけることで、この慢性疲労から立ち直ることができる。伝説の家政婦といわれるタサン・志麻さん、フランスの三つ星レストランでの修行を経て、日本的高级フレンチに就職、腕をみかいた。シェフとして十数年のキャリアを積み、この業界でトップクラスにまで昇った。が、何か空しかった。

Meaning of Life



食は何のためにあるのか。ただ美食家の胃袋を満足させるために自分がんばっているのか。何か違うのでは。自分が今やっていることの意味が見つからず、ただ疲弊した。

結婚、出産を機に、志麻さんは家政婦に転じる。一流シェフから家政婦への転職は、勇気のいることだったに違いない。しかし、今は家事と子育てに忙しい主婦のために、家政婦として台所にたつ。3時間 7,800円で1週間分の家庭料理をつくる。ジャンルを問わず、頭に入っているレシピは600品。彼女のつくる絶品料理を楽しそうに食べる家族の姿に、家政婦としての役割、そして、自分が今まで研いできた技の“意味”を見つけたのであった。

山田洋次監督が「サワコの朝」で次のように語ったのが印象的だった。

「どんな映画でも、ギャングものでもなんでも脚本の根のところに、家族関係をおいておく。親子、夫婦、兄弟など、すると脚本が落ち着くんだよ。」

人間の深いつながり、そして愛すること、愛されること、これ抜きに人生は語れない。この糸が切れたときに、人は深い疲労感に陥るのであろう。

プロフェッショナル 仕事の流儀



伝説の家政婦 タサン・志麻

<事例 DVD等>

ゴミマンション急増/クロ現 2018/5/16
 伝説の家政婦：タサン・志麻/プロフェッショナル 2018/5/21
 食は人生の尊厳/料理家・辰巳芳子/クロ現 2009/10/29
 山田洋次/脚本の軸は家族/サワコの朝 2018/5/31
 マザーテレサ/人間にとって最大の不幸は、
 映画「モンタナの風に抱かれて」/何か恐いことある？
 仏映画「八日目」/慢性疲労の夫、妻がなぜ去ったのか分からない
 映画「愛しのローズマリー」/閉じ込めていたものが、息子に出る
 歌・今井美樹/あなたは あなたのままでいい

円了のホームページ：www.enryo.jp